様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３１７５

研究課題名（和文）親の職業がもたらす社会的圧力が子どもの人格形成・進路形成に与える影響

研究課題名（英文）Parental occupation and the parent-child relationship during adolescence

研究代表者
佐藤　有耕（SATOH, Yuhkoh）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：１０２７３７４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，親の職業という所与の環境によって子どもの心理的な経験に差異が生じ，親子関係や子どもの人格形成・進路形成に影響を与えているのかについて検討した。中学生，高校生，大学生を含む調査対象者に質問紙調査を行い，親の職業に関する記述，親の職業から受ける影響，親の職業に対する評価，親に対する肯定的感情などについて回答を求めた。その結果，親の職業は，青年期の子どもにとって親子関係に影響を及ぼす要因の一つとなることが示された。また，親の職種の違いによって，子どもたちの心理的な経験には差異が生じていることが示されたが，親子関係においては差がみられなかった。

研究成果の概要（英文）：Differences in psychological experiences of adolescents caused by their parents' occupations and the influence of such psychological experiences on parent-child relationships, children's attitudes toward their careers and the self were investigated. Questionnaires were designed to anonymously inquire adolescents about their parents' occupations, the influence of their parents' occupations on them, adolescents' evaluation of their parents' occupations, and adolescents' positive affect for their parents, among others. Junior-high school, high school, and undergraduate student participants responded to these questionnaire. Results indicated that parents' occupation was one factor influencing parent-child relationships in adolescence. Moreover, there were differences in the psychological experiences of adolescents based on parent's occupation. Such differences however, did no affect the parent-child relationship.

研究分野：青年心理学

キーワード：親子関係　職業　大学生　高校生　中学生　質問紙調査

１．研究開始当初の背景

青少年の人格形成や進路形成には親子関係をはじめとして，さまざまな要因が影響することが想定されるが，親の職業が何であるかも影響をもつと予想される。特定の職業人の子どもだというだけで，望ましい人格や行動を期待されたり，能力の高さや優秀な学業成績を期待されたりすることが起こり得るからである。さらには親と同じ進路を選び親と同じ職業選択をすることが当然のこととして期待されることもしばしばである。親の職業から派生する周囲のまなざし，親の期待，そこから生じる自己意識が青年期の子どもの人格形成や進路形成に何らかの影響を与えることは考えられる。重大事件や問題行動の要因として，親が特定の職業に就いている場合の事例を指摘するものもある(片田，2007;二神 2007)。また，それ以前に，親に対する意識や感情に影響を及ぼすことが考えられる(船曳,1998)。しかし，親の職業名を直接的に研究の中で取り上げることは，そう簡単ではないため，これまでに十分な検討がなされてきたわけではない。このような現状を踏まえて，親の職業が子どもに及ぼす影響を検討するための研究を計画した。

２．研究の目的

本研究では，青年期にある子どもの人格形成・進路形成に対して，親の職業という所与の環境がどのような心理的環境を形成し，肯定的・否定的影響を与えているのかを検討することを目的とした。そのために(1)青年期にある子どもたちが親の職業に関連してどのような心理的経験をしているのか，(2)心理的経験の程度は親子関係，子どもの人格形成，進路形成に関連するのか，そして(3)親の職種の違いによって心理的な経験に差異が生じているのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)予備的研究　国立大学 2 校，私立大学 3 校で記述式の質問紙調査を実施し，家の家業，家族の職業について記述を求め，男子 214，女子 221，計 435 名のデータを得た。

(2)第１回調査　中学生・高校生・大学生を対象とした質問紙調査　質問紙の構成は以下の通りであった。1)親の職業に関する項目，2)親の職業を継ぐことに関する社会の価値観の項目，3)親の職業から受ける影響の項目，4)親の職業に対する評価，5)親に対する肯定的感情の項目，6)就業意識および人格形成の指標の項目。評定項目はすべて 5 件法を用いた。質問紙は一部ずつ封筒に入れて配布し，回答後は封をして提出するよう求めた。表紙には，アンケートへの協力依頼のほかに，研究への協力は任意であること，回答することによって調査への協力に同意したものとみなすことを明記し，筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て行っていることを記載した。調査対象者は，短期大学 1 校を含む大学 8 校から 859 名，中等教育学校を含む高校 3 校から 558 名，同じく中等教育学校を含む中学 3 校から 479 名，総計 1896 名(男子 1000，女子 896)であった。平均年齢は 17.24(SD=2.61)歳であった。

(3)第 2 回調査　医学部と教育学部の大学生を対象として，第１回調査と同一の質問紙を実施した。調査対象者は，国立大学教育学部 2 校から 326 名，国立大学医学部 1 校から 181 名，計 507 名(男子 243，女子 264)であり，平均年齢は 19.81(SD=2.23)歳であった。

(4)第 3 回調査　高校生を対象として，第 1 回の調査と同じ質問項目と新たな項目を含む質問紙調査を実施した。1)親の職業に関する項目，2)親の職業に対する社会的評価の項目，3)親の職業から受ける影響の項目，4)親の職業に対する評価の項目，5)親に対する肯定的感情の項目，6)就業意識および人格形成の指標の項目，7)親に関連して生じる動機の項目であった。評定項目はすべて 5 件法を用いた。調査対象者は，私立高校 3 校および公立高校 2 校を含む高校 5 校から 472 名(男子 257，女子 215)であり，平均年齢は 16.16(SD=0.53)歳であった。

４．研究成果

(1)予備的研究において得られた記述資料からは，①親の職業に対する周囲からの反応は，おおむね肯定的な内容であった(e.g. 勉強教えてもらえて良いね，と言われます。「すごいね」「今度治療してほしい」などとは言われます。など)。②親の職業に対する意識は，おおむね肯定的であった(e.g.その職業の重要性を感じると同時に，尊敬もしている。親の職業が子どもたちの間で人気のあるものであれば子どもにとっても誇らしいことである。など)。③それに比して，親の職業に対する嫌悪や反発は量的にはむしろ少数派であった。(e.g. 特殊な仕事であるため，まわりの人に言うのに抵抗があり，一般的なサラリーマンの家庭に憧れていた。私自身の評価や感想に必ず家のことが含まれるのはいただけない。教師の目線で家で扱われるとたまに不快になる。など)

(2)第 1 回の調査結果においては，予備的研究から示唆された内容が支持される結果を得た。得点が 1 点台と低かった変数から考察すると，親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりすること，親や周囲から親の仕事を継承するよう要請されたり期待を向けられたりすること，親が今の職業とは違う仕事に就いてくれていた方が良かったと思うこと，親の職業と同じような仕事に就こうと考えるようになること，これらのことは中学生から大学生の年齢層において経験されることは，全体としてみれば少ないということである。また，得点が 3.5 を越えていた変数から考察すると，親の職業に対する肯定的評価，

親に対する肯定的感情，職に就くことへの意識の高さが全体では顕著であった。現代の青年に関しては，一般に家庭生活に対する満足度が高く，親子関係も良好であることが指摘されており(内閣府政策統括官，2009；NHK放送文化研究所，2013)，本研究の結果もこれを支持していた。

また，親の職業が親子関係にも関連してくることが明らかにされた。すなわち，親子関係においては，自分の親の職業に対する評価や感情が，親に対する感情に寄与していることが示された。親に対する肯定的な感情は，親の職業に対する肯定と否定どちらの気持ちからも関連がみられた。親がもっと違う職業に就いていてくれたらと，親の職業を忌避する気持ちは，親に対する肯定的な感情を低めてしまう。一方，親の職業を経済的な安定から見ても，社会的貢献度から見ても良い職業だと肯定的に評価している場合は，親に対する肯定的感情が高まる。肯定的で良好な親子関係には，親の職業を子がどうとらえているかということも関与していることが示された。子が親の職業を通して周囲から見られることがあるように，親もまたわが子から職業を通して見られているということになろう。また，職業人としての親を身近に見ていることが，親に対する肯定的な感情の高さと関連することも示された。

では，親の職業に対する肯定否定の評価や感情は，どのように形成されるのであろうか。親の職業に対する肯定的な評価は，親の職業をほめられる経験が多い場合に高まることが示された。一方，親の職業に対する否定的な感情は，親の職業を加味して自分が評価されたり見られたりする経験，まわりの人より優秀であることを課せられていること，親や周囲から職業の継承の要請や期待を向けられること，親の職業をほめられる経験の少ないことが関連していた。子どもは，自分が親からいろいろ言われるのは，親がその職に就いているためだと考えて，親の職業に対してネガティブな感情を抱くのだと考えられる。

続いて，親の職業によって生じる子どもの心理的経験の差異について検討した。会社員，教員，公務員，医者，銀行員，自営業，看護師の7職種を抽出して，得点の比較を行ったところ，親の職業の違いによって，子どもたちの心理的な経験にはいくつかの差異が生じており，親が会社員などの場合に比べて，親が医者や教員である場合に特徴的な結果が見出された。それは，親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験の多さであり，親の職業をほめられる経験の多さであり，親の職業を良い職業だと認識する程度の高さである。親が医者である場合の特徴としては，優秀であるようにとの要請，親の職業と同じような職に就こうと考えるようになることも，加えられる。しかし，人格発達的な指標においては親の職種間による違いはみられず，親に対する肯定的感情にも親の職種間による違いはみられなかった。

さらに，顕著な特徴が見られた医者，教員，そして人数の最も多かった会社員の3職種について，さらなる分析を加えた。この3職種に限定して個々に分析した結果，3 職種に共通する結果として，親の職業に対する否定的な感情が強い場合に，親に対する肯定的な感情が低くなるという結果に加えて，子ども本人のセルフエスティームが低下するという結果が得られた。つまり，親の職業に対する否定的な思いが強い場合，親子関係にネガティブな影響を与える可能性があること，さらには自分自身への評価にもネガティブな影響を与える可能性があることが示唆された。親の職業は，子どもにとっては所与の環境であり，子どもには変えることのできないものである。その親の職業に対して忌避する気持ちを持つことは，親子関係の問題だけでなく，自己形成にも影響するおそれがあると言えよう。

加えて，職種ごとの特徴を検討すると，親が会社員である場合の特徴は，親の職業をほめられる経験が高いと，子のセルフエスティームが高まるという結果が得られたことである。また，親の職業を身近に感じられる場合には，親に対する肯定的感情が高まることが示された。会社員の仕事は，社会的な貢献の度合いが見えにくい仕事と考えられるが，それがために，ほめられたり，身近に感じられたりする場合にはポジティブな影響を持つのだと考えられる。親が教員である場合の特徴は，優秀さの要請が職に就く意識の高さと関連しており，ポジティブに機能しているとみられることであった。また，親の職業に対する肯定的評価，親に対する肯定的感情も職に就く意識を高めており，概して親に関連する変数が職業に関する変数とポジティブな関連を示していた。親が医者である場合の特徴は，親の職業を加味して評価される経験が，親と同じ職に就こうとする意識を高め，またセルフエスティームをも高めていた。親の職業を継ぐことの要請も，親の職業への肯定的評価を高めており，親の職業を自分に重ね合わせて見られる経験は，子にプレッシャーやストレスになっているのではなく，肯定的に受けとめられていることが見て取れた。親の職業を加味して評価される経験は，会社員・教員の場合には親の職業への否定的感情を高めるが，医者の場合にはそのような関連は見られなかった。親が医者である子どもの場合には，親の職業をほめられることも多いため，自分が医者の子どもと見られ，期待されていることを受容できているのではないかと考えられた。

(3)第2回調査においては，顕著な特徴の見られた医者と教員について同年齢層で再度検討を加えた。その結果，職種間の比較では，子どもたちの心理的な経験には第1回調査とほぼ同じ差異が見られ，親が会社員などの場

合に比べて，親が医者や教員である場合，親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験の多さ，親の職業をほめられる経験の多さ，親の職業を継ぐことの要請，親の職業を良い職業だと認識する程度の高さ，親の職業と同じような職に就こうと考えるようになることの得点が高くなっていた。

また，親が教員で自分も教育学部に在籍している場合，親が医者で自分も医学部に在籍している場会に該当する大学生を抽出し，さらに検討を加えたところ，どちらの場合にも，親の職業をほめられる経験が多いと，親の職業への肯定的評価が高まり，結果として親と同じ職業に就こうとする気持ちが高くなることが示された。親が医者である医学部生の場合には，親の職業をほめられる経験の多さが，直接，親と同じ職業に就こうとする気持ちを高めることも示された。医師(真野・小林・伊田・山内・藤沢・塚原，2004;森・松浦，2007)，小中教師(田中・小川，1985)に関して職業継承の高さが知られているが，それには親の職業をほめられる経験が寄与している可能性がある。なお，親からの職業継承の要請が，親と同じ職業に就こうとする気持ちを高める結果は見られず，親からの直接的な要請よりも周囲からの評価の影響の方が大きいことが示唆された。

(4)第 3 回調査においては，大学生において顕著な特徴が見られた医者と教員について高校生で再度検討を加えた。

その結果，職種間の比較では，子どもたちの心理的な経験には第 1 回調査，第 2 回調査とほぼ同じ差異が見られ，親が会社員などの場合に比べて，親が医者や教員である場合，親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験の多さ，親の職業をほめられる経験の多さ，親の職業を良い職業だと認識する程度の得点が高くなっていた。加えて，新たな変数として追加されたものの中で，職業については親の職業とは別個に考えたいという得点は親が医者の場合に低く，自分が志望する職に就くことの難度の高さの認識の得点で親が医者の場合に高いという結果が得られた。

また，親が医者である場合の特徴として，第 1 調査の結果と同様に，親の職業を加味して評価される経験が，セルフエスティームを高めていた。親の職業を加味して自分が評価される経験は，親の職業について人に言わないようにする気持ちを高めはするものの，セルフエスティームを高めることが再度示されたことから，親の職業を自分に重ね合わせて見られる経験は，医者の子どもにプレッシャーやストレスになっているのではなく，肯定的に受けとめられているものと見なされた。また，親の職業をほめられる経験が親に対する肯定的な感情を高め，それが親を参考にして将来を考えようとする動機につながり，そしてこの動機はセルフエスティームを高めていた。先にも述べたが，親が医者である子どもの場合には，親の職業をほめられることも多いため，自分が医者の子どもと見られ，期待されていることを受容できているのではないかと考えられた。むろん，順調に進学している高校生が対象となっているため，よりポジティブな結果が現れ出ているという可能性には留意する必要がある。

複数回の調査を重ねて得られた本研究の結果は，親の職業の違いが，子どもたちの心理的な経験に差異を生じさせており，それらの経験は親子関係や自己に対する評価にも関連してくることを示唆した。しかし，親の職業の違いが，直接的に親子関係や人格発達の差異を生じさせてはいないことも示された。そうではあるが，学校に在籍しているという意味では適応的に成長している青少年が対象となっているため，深刻な状況にある青少年については研究できていない。本研究の最大の限界はこの点にあり，そこまでフォローした研究が今後望まれる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

1.佐藤有耕．　親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連．　筑波大学心理学研究．査読有．　46 号．　2015．　45-56 頁．
https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=33268&item_no=1&page_id=13&block_id=83

〔学会発表〕（計　2　件）

1.佐藤有耕．　親の職業による青年期の子どもの心理的経験の差異．　日本教育心理学会第 56 回総会．　2014 年 11 月 8 日．　神戸国際会議場(兵庫県，神戸市)．
2.佐藤有耕．　親の職業による青年期の子どもの心理的経験の差異(その２)：親の職業に関連する変数間のパス解析結果の検討．　日本発達心理学会第 26 回大会．　2015 年 3 月 21 日．　東京大学本郷キャンパス(東京都，文京区)．

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤有耕（SATOH，Yuhkoh）
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：10273749